

夕刊

夕刊 第三種郵便物認可

隋眠を醒せ町民

人口一萬戸を有する反省改善せざるに於ては落
る小名濱町、千軒共暮しの伍者の悲哀を嘗める外ある
も昨今寒氣と供に心細くまいと云ふ、内省するに小
なつてきた、今や平町と共に名濱港は内に船舶少く廻船
に都市計畫の申請と迄漕漕を待つて漁港を運用するに
持つ小名濱町も漁港に次ぐせしむる、又各商店等に
商港を以てする發展階程にても廻船の御客は重要な
ある小名濱町も反省しつゝ、得意として鶴首して待つ
進展せずば途中に空虚が出海の客が薄ければ閑散にし
来る、
現在の港町としての小名濱
に遺憾なきが、他の港を
少しく調ふれば焦燥の念に
からるゝものがある。

玉川村の動き

村長は結局西丸氏か

玉川村駒木根村長を中心と事は否定出来ない迄に暴露
る條件が彼れ等海人の描く理想の港に舟を著けるは自
明の事實で小名濱港は彼等て村内は鼎の湧くが如き案
の描く總ての点に大体合致し、其歸趨をい判断に苦
するであらうか、否とよ航ひ状態である。
海に航海を以て各漁場を廻脚木根村長の刑事事件は公
衆しつゝ、ある警城九高級船列を重なる毎に内容的に判
員に小名濱港と他の漁港と明し、来る九日の公判は
の比較を聞くに頭で問題に判目して村民の注視的となら
ばならぬと嘯く港の便利や關なつて居る、何れにせよ今
係商人などの反省を促すに回の疑獄事件は役場派の専
は各樞要港の視察等をなし横であり村民の意志でない定するか、後任村長たる其

警城軌道株式會社

甦生の曙光見ゆ

支配人に 西丸 猛 君 就任
警城軌道株式會社、西丸君が一般の世評で
受け頻死の状態にあつた警城軌道株式會社を管つた、あつた
城海岸軌道は去る八月連帶警城軌道株式會社を洋々たる將來を
運輸の停北と迄漕漕し世間識して甦生の曙光を辿りつ
一般に内訌見透され其社である。
運は日一日調落を辿り内部
的には從業員の無統制暴落
と悪材料重積の一路を踏踏
に向つて邁進しつゝ、あつた在職中もとより退職後
が其除波を受け最も苦境に陥りなかつた前町長鈴木
申吟せし姉妹會社に丸江運送氏は最近寸暇を得られる
送店がある、丸江運送店に様になつたので先日約二十
其人ありと知られる西丸君の豫程で各地の神社寺閣を
君が持つて生れた快氣が、に公職引御禮をなした

愈々來春四月開校 小名濱水産講習所

軍隊式教育方針で
新校舎は來春迄に小名濱
の海岸二千五百坪を埋立
えしは即ち今の神白なる
と疑ふ可きあらざるなり
降りて桓武天皇の延暦十九
年(約 一〇九〇)前將軍坂上
田村呂凱旋の途次當地に

十月廿二日外宮、内宮、
廿六日金比羅權、全日屋
磯敷に依り健康体に健全
鳴寺、廿八日(岡山)最
上位經王大菩薩、同日
幣中社社備津社、廿日
出雲大社、廿一日松江
山稻荷神社、十一月一
日作樂神社(泊津津山に
り兒島高徳を光る)同日
誕生寺(約八百年前法然
上人の開山開光大師二十
五靈場一番の札所)三日
天村寺(伯耆桑溪にあり
雪舟が面を研究せし所と
して名高し)四日淡川神
社、五日高野山泉院別當
堂剛峯寺、六日熱田神
宮、七日靖國神社同日
治神宮

警城國造神社由緒

祭神建許呂命
ひ建許呂命の遺業を追慕し
人皇第十三代成務天皇四年
事(約一千八百八〇年)に
國郡に長を以て中樞の事
藩屏となす五年秋九月國
に造長を立てらるや、建
國郡に長を以て警城の國
命、國廟を神城今の神白
に構へ長く此地方を鎮撫
られたり、蓋し神城の號是
に依つて起りしならんか爾
來世に變遷あり風時と共に
推遷す而して當文獻未だ完
からざりし爲め何時しか誰
して神白と成りしは想像で
るに餘りあり
和名抄に載する陸奥國警城
郡の十二郷中に神城郷の見
えしは即ち今の神白なるこ
和洋酒

松屋食料品店
作 山 忍
小名濱町中島

